

自閉スペクトラム症児の言語発達過程に関する研究

—記号認識と文脈認識の視点から—

17006PCM 杉田 遼介

I. 問題・目的

自閉スペクトラム症児者（以下 ASD 児者の）の研究は、Kanner (1943) や Asperger (1944) によってその事例が紹介されてから現在まで様々な観点から行われてきた。

初め心因説により説明されていた ASD であったが、1968 年に Rutter の提唱した言語認知障害説により、認知機能に目を向けられるようになり、以後の研究では ASD 児者が障害されている認知機能を特定するための研究が行われるようになっていった。認知機能障害説の中で研究されたのは、Baron-Cohen の着目した心の理論 (ToM) や、Ozonoff の着目した実行機能 (EF) に関する障害仮説であった。結果的にはこのどちらも ASD 児者の基本障害を包括的に説明するまでには至らなかったが、これらが ASD 児者の 1 特徴を明確に示していることは確かであり、現在でも ToM や EF について多くの研究が行われている。

これらの ASD 児者に関する研究結果をまとめたのが Wing である。Wing は 1988 年に自閉症スペクトラム (ASD) の概念を初めて提唱し、対象者を健常者から重度自閉までのスペクトラム上において捉える視点を示した。そして 1991 年には「三つ組の (障害)」という考え方のもと、ASD の主な障害を、①対人関係 (社会的相互交渉) の障害、②コミュニケーションの障害、③想像力の障害として整理し、自閉性障害やアスペルガー障害、小児崩壊性障害などを ASD という 1 つの概念にまとめた。この Wing の提唱した視点は、DSM-5 においても反映されており、現在の ASD 診断の国際的基準となっている。

しかし、依然として ASD の基本障害は明確にされておらず、ASD 研究は様々な着眼点から続けられてきた。その中で、別府・野村 (2005) や Lind (2009)、玉木・海津 (2012) の研究から、ASD

児者の獲得する言語の特殊性が、ToM や EF との関連性の中で注目されるようになった。中嶋 (2007) はその研究の中で、絵の理解課題 (「○○はどこ？」の質問に指さしでこたえる) と絵の名称課題 (「これは何？」の質問に命名でこたえる) に対する ASD 児者の反応を研究した。定形発達児は、①両課題とも不正答、②理解課題に正答し名称課題に指さしで養育者からの支援を求める、③理解課題と名称課題ともに指さしと命名の両方を用いて正答、④理解課題には指さしのみで名称課題には命名のみを用いて正答、の 4 段階を経て、文脈認識 (相手と自分の関係性理解) が記号認識 (物と名称の対応理解) の発達を促進する形で発達していくのに対し、ASD 児には、②のような名称問題に指さしで養育者からの支援を求める段階が見られないことを見出した。このことから、ASD 児は先に記号認識が成立し文脈認識が未成立であるという発達順序の逆転現象が見られることを示した。

そこで本研究では、ASD 児の言語発達の特殊性および記号認識を調査するために、発話、動作、書字という 3 種の言語的表現活動を取り上げ、その発達状況を調査し、該当の ASD 児の療育活動中の振る舞いから確認できる文脈認識と合わせ、彼らの言語発達の特徴を、記号認識と文脈認識の関連性を踏まえて検討する。

II. 方法

- (1). 調査協力者：母子通園施設 B に通う 4 歳から 15 歳までの児童の保護者 18 人の協力を得た、
- (2). 手続き：保護者に対して自分の子どもについて、言語発達の状況に関する質問紙を作成し、2018 年 9 月に配布と回収を行った。
- (3). 質問紙構成：表現活動 3 種 (発話、動作、書字) に関して、それぞれ表現活動の発達状況 4 側面 (表現の構成力、意味共有性、病理行動、語彙・表現活動数) を測定するための項目を設

けた質問紙を作成し、5件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結果

保護者 18 人に質問紙を配布し、その回収率は 100%であった。ASD 診断を持たない 1 名を除いた 17 名を検討対象とし、回答内容に関する検討を行った。

発話の表現能力のうち構成能力を基準として、発達段階ごとに対象児を 4 群に分け、各群の特徴を検討した。第 1 群は、発話の表現構成能力が助詞や接続詞を含んだ段階に達している群であり、第 2 群は単語組み合わせレベル、第 3 群は単語レベルを中心に発話による表現構成が行われている群、第 4 群は発話による主張性に乏しい群である。群ごとの特徴を比較検討した結果、以下の点について示唆が得られた。

①発話の表現構成力を基準として分けた群ごとに他の下位尺度との関連性を検討した結果、発話の表現構成力の高い群ほど、発話の意味共有性や語彙の平均値が高いことが示されていた。このことから、発話表現の意味共有性の高さや語彙の多さが、発話の表現構成力の高さに対応していることが推測された。

②各群の療育場面における行動特徴は、中嶋(2007)の指摘する「記号認識」と「文脈認識」の 2 基準を用いてその違いを説明することが可能であり、第 1 群では「記号認識」「文脈意識」が共に成立しており、第 2 群では「記号認識」は成立しているものの「文脈認識」が不十分、第 3 群は「記号認識」が不成立であるものの「文脈認識」は成立している状況が確認できた。

③発話による表現構成力の高さが他の多くの発達の要素と対応している一方で、動作による表現活動のみ、発話による表現活動が十分に発達している第 1 群に限り逆に乏しくなるという結果が見られた。

④書字による表現活動は、発話による表現活動が十分に発達した第 1 群の中で半数程度の対象児にのみ発達が見られ、同じ群の中でも書字による表現活動の発達が著しい対象児とほとんど書字による表現活動が見られない対象児との二極化が起きていることが明らかになった。

⑤特殊な項目間の対応として、動作による反

復・常同行動が見られる対象児は、発話による表現活動の発達程度にかかわらず、動作・書字による表現活動数が乏しいことが示された。

Ⅳ. 考察

群間の記号認識と文脈認識の成立状況からは、中嶋(2007)の視点でいうと、第 2 群に当たる子ども達が発達の逆転現象を起こしていると言えることができる。仮に ASD 児の発達が単純な発話による表現構成力順(第 4 群→第 3 群→第 2 群→第 1 群)で進行すると考えると、彼らは第 3 群段階で獲得した記号認識を第 2 段階で一時的に失うという、特殊な経過をたどっていることになる。この過程を論理的に説明するのは難しく、ASD 児の発達過程を 1 つの直線的過程と捉えるのは困難である。

また発話による表現能力に長けた第 1 群の対象児に限り動作的表現活動が乏しくなる現象や、書字による表現活動が第 1 群に属す対象児の中でも活発である群とほとんど表現活動が見られない群に 2 極化している現象については、発話言語や動作言語、書字言語そのものが持っている助詞の使用可能性や利便性といった特性の違いや、先行研究から示される、視空間ワーキングメモリに苦手を持つという ASD 児の認知特徴が背景にあることが推測された。

また動作による反復・常同行動が動作・書字による表現活動数の少なさを予測するという結果については、Ozonoff & Jensen(1999)や Hill(2004)、太田(2003)らの先行研究で述べられているような、ASD 児者が、抑制やプランニング機能を中心とする実行機能に不得意を抱えているという特性から説明可能であった。

以上、本研究では先行研究で述べられる ASD 児の特徴の多くが再確認された。しかしそのどれもが彼らの 1 傾向を示すにとどまり、子ども達の発達を全体的に捉える発達モデルの想定まで繋がらないこともまた再認識された。個人差が大きく、その発達経過がまとまりづらい ASD 児の発達の全体像を捉えるには、個々の子ども達の実際の発達経過を通して、それぞれの認知機能の発達や対人関係について詳細な分析を重ねていく必要があると考えられる。